

院政時代の保元・平治の乱と武士の勃興

9世紀中頃より藤原氏の北家（藤原四家の一家）の勢力が強まり、摂関政治（摂政・関白による政治）が始まり、10世紀末に藤原道長の登場により、摂関家の勢力は最高になります。

天皇に娘を嫁がせその子を天皇とし外祖父として権限を摂関家に集中させました。摂関政治と言われます。

しかし藤原道長・頼通親子亡き後摂関家の栄華は斜陽です。

藤原摂関家と姻戚関係がうすくなった後三条天皇は摂関政治を認めず、天皇の専制を目指していましたが。退位して息子の白河天皇に譲位します（1072年）。

後三条は院政をしくのではないかと思われましたが、退位の翌年没します。

白河は後三条と藤原茂子との子で、茂子は藤原摂関家の出ではありません。

そして白河は外祖父、父院（法皇）、母后はすでに亡くなっています。関白は教通（道長の息子）の死後、後の関白織めぐって息子の信長と頼通（道長の嫡男）の息子師実との間でもめます。

関白は従来藤原摂関家内で決めていましたが收拾がつかなくなり、裁定は天皇に頼り関白は師実に決まりました。関白師実は白河にもう頭が上がりません。

これで白河は気にする人はおらず、専権をふるまうことができます。

白河はその後、天皇を息子の堀河（11歳）に譲位しますが、絶対専制の院政をしきます。院政の始まりです。

堀河は天皇のまま1107年29歳で亡くなります。

白河院は堀河の息子の鳥羽（5歳）を天皇にします。孫です。鳥羽は天皇が幼いため白河はいよいよ院政絶対を強めます。

関白の職は藤原御堂家に認めますが、院政には中小貴族から登用した近臣を参画させます。

鳥羽が大人になり政治に参画しようとしたところで、白河院は1123年鳥羽を退位させ鳥羽の子の崇徳を天皇にします（3歳）。白河の曾孫です。

1129年権勢を誇った白河もついに没します。（77歳）

祖父白河院に押さえつけられていた鳥羽院は満を持して院政をしきます。実権は鳥羽院が継承しました。

子の崇徳天皇を排撃し、退位に追い込みます。鳥羽は崇徳を嫌っていました。実は「鳥羽は、{崇徳は自分の子でなく白河院（祖父）の子}」と思っていた」という人が当時からありました。そのせいで後継ぎから外そうと思っていたとの話です。

鳥羽は崇徳をむりやり退位させ、他の息子の近衛を天皇にします（1141年）。

しかし近衛は1155年亡くなります（17才）。

そこで更にもう一人の息子の後白河を天皇にし、その息子を皇太子にします（後の六条天皇）。

そして鳥羽院は翌年に亡くなります（54歳）

崇徳上皇は鳥羽院が亡くなりやっと自分が院政をしける立場になったと思ったでしょうが、弟の後白河天皇は認めません。

院政は天皇の父親、祖父、曾祖父の縦の皇統に認められた制度として崇徳院（後白河天皇の兄）の院政を認めません。

ここで後白河天皇派と崇徳上皇派が兄弟で政権の継承争いをします。

天皇家の継承争いは古代古くからありましたが、天皇派が相手が立ち上がる前に謀反としてたちまち抑えてしまいますので武力闘争にはほとんどなりません（過去に飛鳥時代に壬申の乱があるだけです）。

ここで平安京内で初めて政権をめぐる武力闘争が起こります。これを保元の乱と言い、後白河天皇派が勝ちました。しかし、その後後白河の近臣間での争いの平治の乱で功績のあった平清盛が武士の政権を立ち上げます。

この武士が平安時代にどのような立場にいていかにして保元の乱と平治の乱を経て公家の権勢を凌駕する集団になったのかを見ます。

武士集団は京には源氏と平氏の本流の集団、京を守る検非違使、内裏を守る武官、地方には源氏と平氏の庶流、郡司、郷士、荘園の下司たちの集団が武士と名乗っていました。

地方の武士たちは開発した荘園を京の院、摂関家、公卿、寺社に寄進して本家として仰ぎ地方領主の立場にいました。

京の源氏や平氏は中央で軍事貴族して天皇、院（上皇）や公卿に仕えて、国司（守、介）、内裏の北面の武士、検非違使の任につかせてもらっていました。

関東（平将門の乱等）や奥羽の合戦（前九年、後三年の戦い）等では軍団の長（追討使）として派遣されます。

源氏は奥羽の合戦で自分の郎等（家来）だけでなく平氏を中心とする関東の武士を募って総大将として勝利し、武士団は朝廷から恩賞を得ました。

京の源氏は関東の武士団の棟梁の存在になって行きました。

京では源氏は天皇、院又は摂関家に使える武士団としてその軍事力を提供します。

平安時代の初めに徴兵制による軍団が廃止されました。国の軍団は京では内裏を守る武官（衛門府、兵衛府）、京の治安警察検非違使と地方では国衙を守る警察組織の規模に縮小されました。

地方での大規模の騒乱には対処できません。ここに京の軍事貴族の源氏、平氏や地方の武士団を利用せざるを得ない朝廷の事情があるのです。

朝廷はこの源平等の武士団を使って反乱に対処したのです。そして戦後の褒賞として源氏・平氏の本家筋は中小貴族に昇進します。

特に源氏は関東、東北の反乱の鎮圧に貢献し、京で軍事貴族としての勢力が目立ってきます。

白河院は源氏に対抗させるべく平氏を重用する政策をとります。国家で軍事を一つの私的軍団に委ねてしまうことの危険性は感じていたのです。

源氏は関東武士団を傘下に、平氏は西国、瀬戸内海の武士団を傘下に両者は軍事貴族としてライバルの関係に成長していきます。

それでも源氏も平氏も公卿ではなく中貴族の位置で、格の上では天皇や院（法皇）の諸太夫・郎従（家来）の位置にありました。

ところがこれが逆転、公家政権から武家政権へ大転換となった保元の乱と平治の乱とは何だったのかを見てみます。

先ず保元の乱です。

上述しましたように白河天皇 VS 崇徳上皇の図となります。これが京で武力闘争となりました。

この武力闘争になったのには背景があります。

天皇家の二人の争いに藤原摂関家、源氏、平氏それぞれのお家騒動が絡んでいるのです。

摂関家では、①関白忠通 VS ②忠実・頼長が関白織めぐって対立（忠通と頼長は忠実の息子ですので親の忠実は弟の頼長に味方します）。

源氏では、①義朝 VS ②為義が親子不和（為義が親）

平氏では、①清盛 VS ②忠正の甥と叔父の不仲

この上記①が後白河側につき、②が崇徳上皇側につきました。

保元元年（1156）年京の洛中での合戦です。後白河側は近臣の信西が参謀で、源義朝、平清盛軍そして崇徳上皇側は藤原頼長が参謀で、源為朝、平忠正軍との戦いです。

義朝と清盛軍連合軍が圧勝しました。崇徳の御殿の白河殿を” 2～3時間で落としました。後白河天皇の勝利です。

崇徳側の藤原頼長は戦傷がもとで死没、義朝の親の為朝と兄弟5人そして清盛の叔父の忠正親子5人は斬首、崇徳上皇は讃岐に配流の処分が下されました。

極刑の処分は信西の主張によるものです。

義朝は父親の斬首も受け入れたにもかかわらずとして、戦後の褒賞に不満でした。

戦後の政局は後白河が退位して法皇となり、子の二条に天皇を譲りました。

政局は後白河院の近臣の信西が仕切る様相となりました。

源義朝と院の近臣藤原信頼は政治主導を信西から奪うため反乱を起こし、信西を殺害しました。

清盛は熊野参詣から急遽京に戻り、自館の六波羅にこもります。

義朝と信頼は軟禁していた後白河院と二条に逃げられます。そこで清盛の六波羅を攻めますが敗退します。

義朝は関東に逃げる途中で味方に謀殺されます。長男義平は処刑、二男は戦傷で没、三男頼朝は幼いことから伊豆へ配流の処分です（後年、この頼朝が平氏打倒で立ち上がるのです）これが平治の乱です（1159年）

戦後は後白河院が政治を主導するのですが、清盛の平治の乱での功績は大きく、位階を上げ、乱の8年後には太政大臣になります。政治の主導は院から清盛に移ります。

清盛は後白河院の息子の一人^{のりひと}憲仁（8歳）に娘徳子を嫁がせます。後に高倉天皇（1168年即位）となり、安徳天皇を生みます。

平氏政権・清盛の絶頂期です。

しかし1180年（治承4年）に後白河の息子の一人^{もちひとおう}以仁王が立ち上がり（失敗）、更に頼朝が伊豆で立ち上がるのです。

後はお存知の通り、頼朝が鎌倉で武家政権を立ち上げます。

そう意味で保元、平治の乱は武家政権の発足への画期的な乱だったのです。

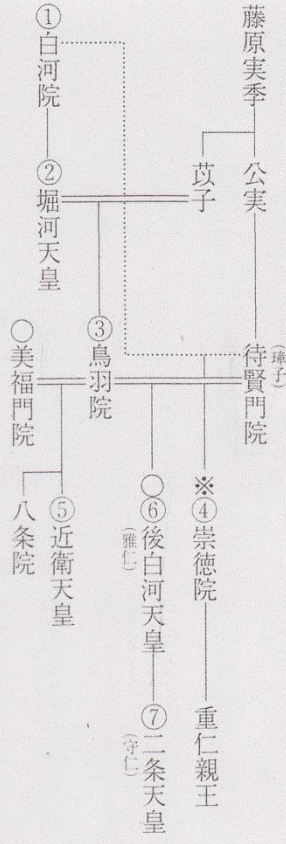
以上

2020年2月12日

梅 一声

保元の乱時の勢力分布

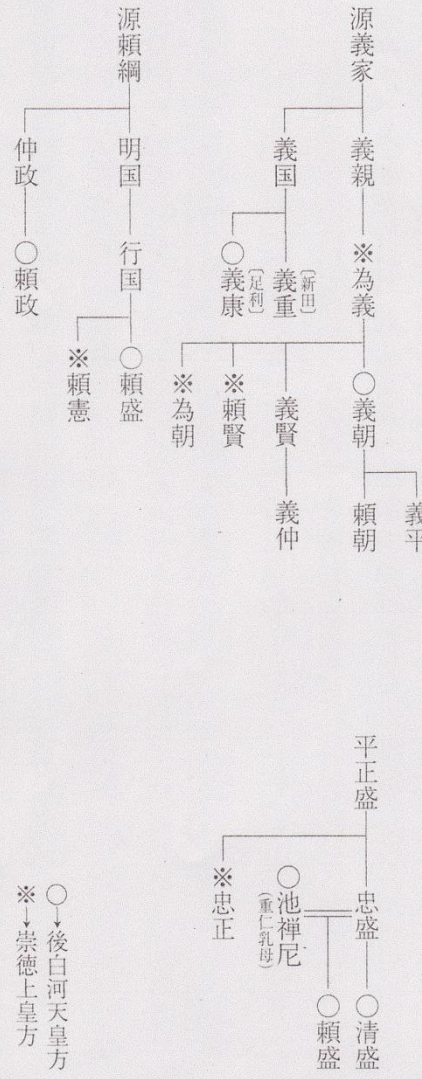
〔王家〕



〔摂関家〕



〔武士〕



○ ↓ 後白河天皇方
 ※ ↓ 崇徳上皇方